かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

色とりどりの花を咲かせたヒラドツツジ
（5月11日 大教会神苑で）

教祖１３０年祭に向かって

三年千日 **さあ！ おたすけ**

祈る　動く　つなぐ

立教176年 5月号

四月月次祭講話

どんな中も「をや一条」に徹して歩もう

世話人 島村廣義先生

四月二十一日、大教会四月祭典にご参拝くだされた世話人・島村廣義先生は、それぞれに諭達巡教を受講した私たちに対して、再度、「教祖年祭の元一日と年祭活動の歩み方」について諄々とお話しくだされた。

続いて、三年千日活動は短いようで長い、惰性や怠慢に流されて心定めの滞らぬように、三日ごとに仕切ってひながたの道を心定めて通るよう諭され、また、日々のよふぼくの心構えとして、「をや一条」につとめきって通ることが御守護をいただける元になると、おたすけの体験を交えてお話しくだされた。講話の要旨は次の通り。

▼「諭達」は「鏡やしきから打ち出す言葉」

教祖130年祭に向かっての三年千日活動を進めるに当たり、真柱様は『諭達第三号』を発布されました。

おさしづに

鏡やしきから打ち出す言葉は、天の言葉である程に。理を恐れず、あんな事言う、あんな事と思えば、あんな事になる。めん〳〵身上もあんな事になる程に〳〵。

（明32・2・2）

と諭されます。

「諭達」は、正しく鏡やしきから打ち出されるお言葉であり、私たち、道を通る者にとっては、今日のよふぼく一人ひとりに頂戴した、言わば「刻限のおさしづ」とも申すべき、同様の重みをもって受け止めねばならない大切なお言葉だと思います。

この「諭達」を発布された真柱様のお心は、「全教よふぼくの仕切っての成人と一手一つの活動に資したい。」と仰せられる親心からです。

をやの思召しは一つであっても、人それぞれに許された心の自由から、また、それぞれの信仰の上から、その成人に応じた心の治め方・悟り方がありますから、皆の心がなかなか一つに揃わないということも、得てしてありがちです。

しかし「教祖の年祭活動は、どうでもこうでも全教が一手一つに心を結び合って、教祖の親心にお応えもうさねばならない」との強いお心から、発布されたものだと拝します。

真柱様の親心を、しっかりと心に納めて、をやのお心に添いきって、教祖にお喜びいただける成人の姿をご守護いただきたいと思います。

▼教祖年祭の元一日

教祖の年祭をつとめる根本は、子供の成人を急き込み、促される上から、教祖が定命を25年縮めて現身を隠された明治20年陰暦正月26日の事情に由来します。

教祖の身上に異状を見せて、その切迫する身上を台として、たすけ一条のつとめの急き込みを促されるとともに、あらゆる人間思案を断ち切り、ひたすら

＜実行目標＞人のたすかりを願いましょう

おたすけ・お願いカード 集計：5，574枚

平成２５年３月２１日～４月２０日

平成25年累計：10，377枚

親神様を信じ、もたれきって通る神一条の道の通り方を厳しく仕込まれました。

初代真柱様を芯として、当時の先生方は、教祖の仰せ通りにおつとめをつとめたのだから、きっと教祖はお元気になられたと思われたことでしょう（詳細は『教祖伝』第十章を参照）。

しかし

つとめを無事了えて、かんろだいの所から、意気揚々と引き揚げて来た一同は、これ（教祖が現身を隠されたということ）を聞いて、たゞ一声、「ワーッ」と悲壮な声を上げて泣いただけで、あとはシーンとなって了って、しわぶき一つする者も無かった。

と御伝には記されています。

全く、立って居る大地が砕け、日月（じつげつ）の光が消えて、この世が真っ暗になったように感じた。

と先生方の驚愕、落胆された様子が残され、官憲の迫害・干渉・弾圧の中、仰せ通りおつとめをつとめると、教祖に直接ご苦労をお掛けする。そのご苦労を思うとなかなかおつとめに踏み切れなかった先生方のご苦衷（くちゅう）は、私たちの想像を絶する、想像以上のことだったでしょう。

その教祖の身上を台に「さあ、今というたら今、すぐ掛かれ。悠長なことを言うている場合ではない。お前達は法律が怖いのか、をやの話が尊いのか、どちらに重きをおいて信心をしているのか」とつとめの決断を促される厳しいお仕込みに、一同心を定め、差し迫る教祖の身上から、「命捨ても」との覚悟で、おつとめをつとめられました。

その結果は教祖が現身を隠されるということになりました。

嘆き悲しみは一通りではなかったでしょう。内藏の二階で飯振伊藏を通しておさしづを伺われますと、

神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。扉開いてろっくの地にしようか、扉閉めてろっくの地に。扉開いて、ろっくの地にしてくれ、と、言うたやないか。思うようにしてやった。さあ、これまで子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん〳〵に理が渡そう。よう聞いて置け。

（明20・2・18＝陰暦正月26日）

というお言葉が下がります。

まさか「扉を開く」と仰せられることが教祖が現身を隠されることを意味しているとは思いもされなかった先生方は、「扉を開いてろくぢにならしくだされたい」とお答えになったわけです。

親神様はその返事を聞き届けられて、まだ25年先ある定命を縮めて現身を隠される結果になったと思案しますが、それは――子供可愛い親心ならではのお心配りで、子供の成人を促されると共に――現身を隠されることによっておつとめをつとめることに踏み切れなかった原因を取り除かれたものと思案します。

それは、世界一れつをたすけるために、一日も早く陽気ぐらしの世の状に立て替えてやろうと思召す親心から、たすけ一条の根本の道として教えられたおつとめを、誰に気兼ねすることなく十二分につとめられるようにされたことであり、また、世界の人々に、誰はばかることなく、親神様の思召しを伝えるにをいがけ・おたすけのできるように、布教ができるようにされた、子供可愛い上からの親心であると思案します。

「今からいよいよ世界を駆け巡ってたすけをする。今までとこれから先とどう違ってくるかしっかり見ていよ。さあ、これまで思う様に授けることができなかったが、これから先、段々にその理を渡そう」と、広くさづけの理を渡されるとともに、教会名称の理のお許しも頂戴する。積極的な世界だすけの道、たすけ一条の道の展開を促されたものと思案します。

教祖は、現身を隠されましたが、お魂は元のやしきに留まられ、ご存命のまま世界一れつのたすけに働かれています。

これが教祖の年祭の元一日です。

▼年祭活動の歩み方

教祖が現身を隠されるということについては、親神様はおふでさきの中で予め日限をお示しになり、つとめのもよう立てを整えていかれるとともに、仕切って神一条のつとめ方を厳しく仕込まれ、人々の成人を急き込まれました。

十一に九がなくなりてしんわすれ
正月廿六日をまつ　三 73
このあいだしんもつきくるよくハすれ
にんぢうそろふてつとめこしらゑ　三 74

このおふでさきの注釈によりますと、

このお歌は教祖が現身をおかくしになることを示されたもので、教祖御在世中は教祖を目標として社会の迫害がだんだん激しくなるので、かくては道が遅れるから、教祖は二十五年の御寿命をお縮めになり姿をおかくし下され、世間の圧迫を少なくして道を弘めるもよう立てをする。それまでに真柱も定まり、かんろだいも建設されるから、皆の心も澄まして、早く人衆そろえてつとめごしらえに取り掛かるようにせよ、とお諭しになったのである。（後略）

と説明されています。

明治7年、教祖77歳の御時ですが、このおふでさきを書かれたときの背景を色々と思案しますと、明治7年は、本教にとって重要な事柄があった年です。

真柱を早く定めるよう急き込まれ、また、かねてから教祖の里方の兄・前川杏助様に製作を依頼されていた神楽面をお迎えに出向かれ、また、出来上がった神楽面をつけてかぐら・てをどりをつとめられ、毎日毎夜、おつとめの稽古がなされるなど、着々とつとめのもよう立てが進められていたときのことです。

そうしたときに教祖は仲田儀三郎・松尾市兵衛の両名の方に「大和神社（おやまと）に行き、どういう神で御座ると、尋ねておいで。」と使いに出されています。

まさにこの時から、教祖直々、積極的な高山布教が始まり、ご苦労が始まります。

神職に対して教祖は「学問に無い、古い九億九万六千年間のこと、世界へ教えたい。」と仰せられ、また山村御殿の節にあっては「親神にとっては世界中は皆我が子、一列を一人も余さず救けたいのや。」と仰せられて、教祖御自ら、積極的に高山へ布教に出られるとともに、この年の12月26日には、赤衣を召されて、自ら月日のやしろたるの理を闡明（せんめい）されるとともに、その赤衣のお召下ろしを証拠守りとして、弘く人々に渡され、さらには、さづけの理をも渡されました。

年が明けて明治8年、かんろだいのぢば定めが行われ、一層つとめの完成と成人を促され、急き込まれる。そうした時に、親神様は、重大な時旬の迫っていることを、おふでさきをもって予めお教えになり、人々に日限を仕切って、厳しく、つとめ一条・神一条の道の通り方を仕込まれ、成人を促されたをやの御心です。

更には25年先の定命を縮めて現身を隠され、誰に気兼ねなくおつとめのできるように、また誰はばかることなく布教ができる、にをいがけ・おたすけができるようにされた、子供可愛い一条の親心です。

この親心を思案しますと、何としてでも、教祖にお喜びいただき、ご安心いただけるように成人しなければ、よふぼくとして全く申し訳ない。

これが私たちの教祖の年祭をつとめる心でなければならんと思案します。

教祖の年祭は役向きの上から、あるいは、立場の上からつとめなければならん、つとめなければならんからつとめるというのではなく、つとめさせてもらわずにはおれない私たち道の子のをやを慕う報恩の真心をもってつとめるのです。

▼三年千日のつとめ方

年祭活動が打ち出されて4ヶ月を過ぎようとしています。「諭達」を発布されてからは、（三年千日の括りを外すと）半年近くになりますが、それぞれが三年千日の出発に当たって定めた、その心

定め通り、しっかりつとめたい。

ついつい惰性に流れてしまい、心定めとは程遠い結果になってしまうということのないように。心定めは、誰でもその気になれば定めることができますが、その定めた心定めを守り通すということが難しいのです。

定めた内容の如何を問わず、仕切る期間が長ければ長い程、その達成を目指して、思い念じて通りきるということは、なかなか容易なことではありません。

教祖の5年祭を前にした刻限のおさしづに

口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た。なれど千年も二千年も通りたのやない。僅か五十年。五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えばいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。何程急いたとて急いだとていかせんで。ひながたの道より道無いで。（明22・11・7）

と仰せられます。

陽気ぐらしへ導かれるたすけ一条の道は、この教祖のひながたの道を辿る以外に、他には道がないことを教えられるとともに、そのひながたの道を50年も通れと仰せられるのではなく、「三年千日通ればよい。しかし、この三年千日の道を通るということが難しい。10年の中の3つ。3日の間の道を通ればよい」と仰せられます。

教祖の通られた50年のひながたの道を思えば、三年千日は、ほん三日ぐらいのものだから、しっかりひながたの道を心定めて通るようにと、諭されているように思案します。

私はこのおさしづを拝読しながら、「三日の間の道」とのお言葉から、こんなことを思ったのですが、私たちが重病人や長患いの方々のおたすけに掛かるとき、一番長い仕切り方が三日です。三日と仕切って心を定め、おたすけをお願いしますが、三日三夜でご守護を見せていただけない時には、更に三日と仕切って心を定め直して三日三夜の追い願いをするように、年祭活動の三年千日も、三年といえば、大変長い日数ですが、「三日、三日」と日限を仕切って頑張る。三日振り返って、「また三日」と定めて頑張る。この三日間の道を積み重ね、積み重ねして通る三年千日の誠真実を親神様は求められているのではと思案します。

真柱様は、『諭達第三号』で、教祖130年祭へ向かう、その活動、具体的なその行動は、にをいがけ・おたすけだ。年祭活動、今だからこそ、全よふぼくににをいがけ・おたすけを心掛けてもらいたいと仰せられます。

にをいがけもおたすけも、助かってもらいたいという誠真実が台となる。それは私たちの日頃の心遣い・通り方によること、また、それゆえ、私たちは、日々、教えに基づくそれぞれの生き方・心掛け、これが大切です。積み重ねて、道の信仰者に相応しいものの考え方や態度を身につけることが肝心だと、このようにも諭されます。

この「諭達」の思召を体して、三年千日、それぞれに心を定めて成人の歩みを進めることになりますが、心定めの具体的な内容はそれぞれに異なっていても、教祖にお喜びいただきたい、少しでも成人した姿をご覧いただきたいとの心は、皆同じです。

自らの惰性や怠慢で、心定めの滞らぬよう、旬の理をいただいて、勇みに勇んで、三年千日の活動に取り組みたいと思います。

教祖の年祭活動の時旬、旬というのは、一番厳しく仕込まれますが、また一番ご守護を頂戴できる旬でもあると思います。

▼「をや一条」につとめきって通る

今まで、年祭活動を進めてきた中で、私もいろんなおたすけの体験をしました。

これは、ちょうど120年祭活動をしているときの、部内教会の会長さんの身上のおたすけについて、一つのおたすけの例話を申したいと思います。

この会長は、教会がかって神殿普請をされるとき、その教会の御用を支えるために働きに出ておられ、その時は、父親が教会長でした。

世間で働いているときに結婚した奥さんで、信仰はされるが、教会を後継するということには、なかなか、決心が付かず、教会には住んでいませんでした。

それが、会長である父の出直により、教会を継ぐことになり、奥さんと子どもさんは、信仰はするけど、教会へ入り込んで「教会の奥さん」はできないということで、夫婦が別居することになりました。

そうした中で、教祖120年祭活動が始まりました。

そんな中、上級の会長さんの全くの個人的な借金事情から、上級の教会が非常に窮地に立たされるという事情が起こりました。

その中を本当に、不足事を一つ言わずに、をや一条につとめきって通られたその道中に、この会長が、舌ガンになりました。

舌の左の根元に腫瘍ができまして、根元を三分の一ほど切除するという手術を受けられました。

その手術の内容を聞いてびっくりしましたが、自分の太股の内側の皮膚を切り取って、その皮膚を二つ折りに畳み、切り取った舌のその部分の形に成形しなおして、それを、根元に移植したそうです。

そんなことで、舌の働きをするのかなと、私は本当にびっくりしました。

舌で味覚を感じるのは、先っぽの方らしくて、食べて物の味わいは、先っぽの方は切り取ってませんので、味覚は感じるわけです。

だけど、舌は、物を食べるときに、食べたものを奥へ送り込んでいく蠕動（ぜんどう）運動をして、物を送り込んでいく働きもしていますが、移植した皮膚でそんなこと出来るのかなと心配しましたが、その働きをするそうです。

さらにまた、声を出す、言葉を発するために、舌の動きは絶妙な動きをして、喉の声帯と絡み合って、口の開け方、舌の動きで発声が出来るのだそうですが、話をするのも問題はないと、本当に不思議なご守護をいただきました。

脚の太股のところの皮膚が、舌のところへ移植して、舌の働きをする。

ＩＰＳ細胞を発見してノーベル賞を受賞した京大の山中教授、「人工多能性幹細胞」というそうですが、いろんな臓器になっていくという、そういう細胞を発見されたということですが、細胞どころか、皮膚がそういう働きをするということを聞いて、私もびっくりしました。

見せられた身上については、さんげしなければならないことがあったのでしょう。心の底から深くお詫び申しあげるとともに、真剣、命懸けで、神一条に通りきる覚悟を定められました。

常日頃からをや一条につとめきって通ってこられた会長さんでしたから、このたびの大節についても、親神様は、会長の真実誠をお見定めになり、大難を小難にお連れ通りくださったと思いました。

おさづけを取り次ぐときに、舌のところと喉、そして、太股の皮切り取ったところ、３ヶ所におさづけを取り次ぎましたが、本当に、この人が、そんな物凄い手術をした人かということが全然分からない、鮮やかな御守護をいただきました。

ところが、この三年千日の活動を終わって、いよいよ年明けて、教祖の年祭を迎えるその直前に、「会長さん、癌がリンパへ転移した」と言ってきました。極め付け、深い大きなお仕込みだと思いました。

みんなが心配して、身上の再発をおそれていましたが、「腹括って、心定めて、お願いをさせていただきたいので、一言、お諭しをいただきたい」と、上級の会長から頼まれました。

結論は、「全て納消して、一から生まれ更わらせてもらわなけりゃならん」ということを、いろいろと話し合いもし、「これ以上、手術をせずに御守護をいただきたい」という上から、「手術代、全部お供えしよう」ということになりました。

手術の前日「もう明日、いよいよ手術、何時から」というときに、その腫瘍を確認し、リンパへ移っているやつを、何時からと手術の時間まで決まっていましたが、上級を通しておたすけの理立てをおぢばへ繋がせてもらい、上級の会長からおさづけを取り次いでもらいました。

すると、前日まではっきり癌ということを確認し、これを摘出するというところまで決まってたのが、消えて無くなっていました。

本当に不思議なご守護でした。

年祭の年の正月、本当に直前のことです。お節会の終わったそのときに、こういう事態になったわけです。

本当に年祭の直前に大節を見せられましたが、それをまた鮮やかに御守護いただかれ、26日、教祖の年祭をつとめ、その月の後の、2月の修養科生の教養掛をつとめられました。

私は、素晴らしい御守護をいただかれるだけの、やはり、常日頃の、教会長としてはもちろんですが、よふぼくとして、神様に、受けとってもらえる真実、をや一条のつとめ方が、御守護をいただける元になっていると思いました。

何一つ不足事を言わず、一生懸命にぢばに心を繋ぎ、つとめきって、黙々と、また、にをいがけ・おたすけに歩いておられる真実の姿に、見せられた身上は、大変厳しい大きなお仕込みでしたが、鮮やかな御守護に結び込んでいただきました。

もう10年超えていますが、今日も、元気に、この会長は、にをいがけ・おたすけに頑張ってつとめてくれています。

このことは、また、地域の話しの台となって、みんなの勇みになり、それぞれがおたすけに頑張ってくださっている元となっています。

教祖130年祭に向かう三年千日も、たすけの旬、また、成人できる大切な、また、大事な時旬だと思案します。

ひたすらに、教祖のひながた、一つ、一つ、よふぼくが、できることから実践し、教祖にお受け取りいただく、その誠真実を、しっかり繋ぎたい。

また、教祖は、大きな親心をもって、私たち子供の足りないところを補って受けとるとも仰せられますから、よふぼく一人ひとりが、三年千日、仕切って、ひながたの道を通る決意をしたい。その決意に基づく、一人ひとりの真実が、必ずや、また、親神様・教祖が受け取られ、働かれる元となると信じます。

どうでも一つ、仕切り根性、仕切り力、仕切り智慧、仕切りの道、どうでもこうでも踏まさにゃならん。

（明40・5・8）

と仰られます。

改めて、私たち全よふぼくが、どんなことからでも、おたすけに立ち上がることを、共にお誓い申しあげましょう。

周囲に心を配ることから始め、形や方法にこだわらず、いつも、どこでも、進んで声を掛け、繰り返し、繰り返し、根気よくにをいがけの習慣を身に付けて、「論達」に示される具体的な行動の角目を実践しましょう。

心を合わせ頼もしい道を作りてくれ。あれでこそ真の道であると、世界に映さにゃならん。

（明35・9・6）

と仰られます。

今こそたすけの旬、教祖130年祭活動の始まり出しの今、これからの三年千日、一日一日を全よふぼくが、教祖のたすけ一条の道具衆として、一手一つに合力し、仕切っておたすけに踏み出ましょう。

存命の教祖にお喜びいただけるよう、共々に、つとめ励むことを、お互いに、ここにお誓い申しあげて、私の本日の責めを終えたいと思います。

《以上要約。文責：編集掛》

育ち、育てる心が 年祭活動の芯

4・19

第95回婦人会総会

4月28日付、天理時報で既報の通り4月19日、婦人会第95回総会が親里で開催され国の内外から約4万2千人の会員が参集、真柱様のお言葉、中山はるえ婦人会長のあいさつを受けた。教祖130年祭に向けての三年千日活動への踏み出しの総会となった。

午後からは記念行事として詰所に会場を移して「支部の集い」が行われた。総会における真柱様のお言葉、婦人会長のあいさつをもとに話し合い、活動方針の徹底と会員の意識、成人を高めようというもの。

笠岡支部（上原きよ㋮支部長）は、午後0時30分から講堂で263人（受付数）が参加して「支部の集い」を行った。参加者を10―11人の23班に分け講堂と3階の部屋を使用し、各班の司会者を中心に活発な話し合いがもたれた。

この後、講堂で女子青年と同担当委員11人による息の合ったハンドダンスが行われ、集いを盛りあげた。

引き続き、上原きよ㋮同支部長は「総会で真柱様のお言葉、婦人会長様のあいさつを聞かせて頂き、皆さんが感じられた事を今、各班で話し合って頂きました。いろんな感じ方、思いがあったと思います。これだったら私にも出来るかもしれないと思われた事を、今日からそれを目標に通り、来年、教祖にこれだけ頑張る事が出来ましたと、ご報告出来るお互いでありたいと思います。真柱様のお言葉を通し、婦人会が今、つとめていかなければ、また考えなければいけない角目、またこの道を歩もうとする者にとって教祖のひながたを今一度、しっかりと考え直さねばならないと感じさせて頂き、婦人会長様のお話しからは、新たな活動方針を通して婦人会の年祭活動の芯として、まず自分の子どもを、そして身近な人達にもしっかりとこの教えが分かる様に育てあげねばならないと思いました。年祭活動は親神様、教祖にお喜び頂くために人のたすかりを願わせて頂く日々が大切で、その心を持って教会のご用、婦人会活動におつとめ頂きたいと思います。まずここにいる私達から育つ、育てる努力をしっかりとさせて頂きましょう」とあいさつ。

その後、上原明勇青年会笠岡分会委員長が青年会活動に対するお礼と○おやさとふしんひのきしん隊への入隊○あらきとうりょう塾への参加について、婦人会からも呼びかけをして頂きたいと協力を要請した。

新たな活動方針「全婦人会員はご恩報じの道を邁進（まいしん）しよう　一、教えを実践して実のよふぼくに育つ　一、身近な人を実のよふぼくに育てる」の実行を誓い合い午後2時すぎ閉会した。

参加者全員に帰路の際、食べて頂こうと袋詰にされたお菓子とジュースが配られた。

グループに分かれ司会者を中心に活発な話し合いが行われた

「家族揃って月次祭参拝」開催

4・21 祭典後

少年会

少年会笠岡団（武内正美団長）は4月21日、大教会4月祭典後、神殿で「家族揃って月次祭参拝」を開催、育成会員を含む約70人が参加した。

婦人会・青年会・少年会の三会が合同で提唱している「家族揃って教会参拝」を呼びかけでなく推進実行していこうと今月から開かれたもの。

少年会員向きのお話しや催物を通して、教会の楽しさ、また少しでも教理にふれてもらい、将来、教会につながってもらいたいと祭典が日曜日の月に計画している。

今回は少年会委員によるパネルシアター（「真心の御供」＝稿本天理教教祖伝逸話編7＝）が行われ、参加者に祭典時、教祖にお供えされたお菓子が配られた。

今後の開催予定は7月・8月・9月・12月の各祭典後。同会では1人でも多くの参加を呼びかけている。

なかなかの盛況ぶり

教会長夫妻が　率先して　よふぼくの丹精を

教会長夫妻講習会　開催

布教部

布教部（田中隆之部長）は4月28日、午前10時から大教会で、講師に山内宣暁先生（名東部属、賀永分教会長・本部講演部講師）を迎え「立教176年教会長夫妻講習会」を開催、教会長夫妻など170人（受付数）が参加した。

神殿での開講式で大教会長様は「この度の講習会は年祭活動を活発化するための大切な旬に、一つ一つの教会がよふぼくへの丹精力を養う事が目的です。教会長夫妻が力を合わせて通る中にお見せ頂く身上・事情は、私達の今後の通り方を示す親神様の深い親心と思案して通って頂きたい。4ヶ所で追加諭達巡教を実施するので、受講されて

手振りをまじえ自らの信仰体験を通し話される山内先生

いないよふぼくの方に参加して頂けるよう会場、日時の声かけを徹底して頂きたい。講習会で、年祭に向かう勇みの種を心のお土産にして帰って下さい」とあいさつ。

引き続き、会場を講堂に移し、山内先生は第一講として「年祭に向かう教会長としてのつとめ方」、午後からの第二講は「よふぼくへの丹精」について、親の信仰を台にした自らの信仰体験を通して、悟り方、教会長としての姿を話され「年祭活動三年千日は自分の特長を生かしたつとめ方でお通り頂きたい」と話された。質疑応答も行われた。

参加者全員に、布教の実践例などが紹介された小冊子がテキストとして配布された。

最後に田中同部長が「おたすけの出来るよふぼくに成人して頂くために『おたすけカード』を活用し、教会長夫妻が率先して声かけにつとめ、丹精に励む事が必要不可欠です。山内先生のお話しや配布した冊子の中から、こんなやり方もあるんだと、おたすけに幅をもたせたつとめ方でお通り下さい」と閉講のあいさつをし午後3時すぎ閉講した。

大きな物も細かく解体（島中）

一本一本丁寧に打ち込んでいく（真府）

有志ひのきしん隊 活動報告

青年会

本年2月より活動を展開している、青年会有志ひのきしん隊。3月・4月は次のような活動を行った。

3月17日、島中分教会（広島県尾道市）に出動。青年会員、少年会員合わせて15人が、タンスなど家具の解体や、教会の倉庫整理を行った。

続いて4月16日には、真府分教会（広島県府中市）に出動し、5人が参加した。この日は、教会に隣接する駐車場で、陥没している場所への土入れ、看板の立て替え、区画用ロープの張り替えなどを行った。また、「天理青年、たすけの渦を巻き起こそう」の合言葉の下、両日共にひのきしん後、拠点教会周辺で神名流しを行った。

『青年会有志ひのきしん隊要項』

活動日：全教行事、大教会行事（青年会が関係するもの）以外の日曜日
※平日の場合、応相談です。

申込先：大教会神事所　上原一始
（毎月20日申し込み締め切り）

内容について：
・ひのきしんですので、業者の技術・装備が必要な内容は、ご遠慮下さい。
・原則として1日で終わるもの。

おぢばの学生同士 親睦深め

学担

笠岡学生担当委員会（山野弘実委員長）は、4月27日、親里管内の学校に通う高校生、大学生、専門学校生を対象に新入生歓迎会を開催し、学生15名が参加した。

当日は土曜日のため午後からの開催となり、参加者はまず、バーベキューを囲んで、楽しいひと時を過ごした。続いて、3つのチームに分かれて、本部神殿や記念建物、南右第2棟などを巡るウォークラリーを行った。地図を見ながら進路を決め、何箇所かのポイントでは問題が出される事もあり、メンバー同士話し合い、協力しながら進めていった。

ゴール地点の笠岡詰所に着く頃には、どのチームも和やかな雰囲気で、おぢばの学校で学ぶ笠岡につながる学生同士、親睦深めた一日となった。

笑顔いっぱいの仲間達

談話室

お参リ

弥高山分教会　藤本節子

教祖ご誕生祭。西回廊から窓越しに見る。国々、所々からの、「おぢば」目ざしての人の波、波。ふとかたつむりの大移動思い浮ぶ。日記帳操る。昨年六月二十二日。

「生れ出でし 真珠のような かたつむり 教会めざして 一斉移動」

主人と二人で朝づとめに参拝している時の情景が思い浮ぶ。雨あがり陽光をあびに草むらから一斉に這い出た五ミリ位の真珠そっくりのかたつむり、道巾三メートル位ぎっしりと。よく〳〵見ると微々、微々と動いている。踏まないよう、ひかれないようにと朝参り。それも草もない教会玄関目ざし大移動。大自然の営みの南無不可思議。主人共々感動した一瞬でした。

弥高山分教会建立以来、朝づとめに参拝のただ一度だけ、この日、この時刻の出会い。参拝からの帰りにはかたつむりはパラパラと見受けられた。陽光前のひとゝきの光景。

教祖御誕生祭ご参拝を御縁にすばらしい感動を呼び戻すことが出来、生涯の宝としていつまでも心にとゞめておきたい。

主人八十五歳。私八十歳。

温故知新

いきいきエピソード 24

常に先廻りのご守護

教祖五十年祭をつとめさせて頂き、働きも済まさせて頂いたのですが、昭和十四年台湾伝道庁長の御命を戴きました。ちょうど教典の講習会で東京地方から四月一日に甲府分教会へ行っておりますところへ、電報が参りました。東大教会の叔父さんからでした。「台湾伝道庁長に御任命おめでとう」四月一日ですから、どうもはっきり分かりませんでした。それが昼前の事で午後になって、今度は本部から電報で、「三月三十一日付台湾伝道庁長を命ず」これは三月三十一日付ですからほんまもんです。

ところがこれまでは、伝道庁長や教務支庁長は、本部に籍のある者でなければ御命が戴けなかった。本部に籍があるとは、本部員、准員、青年でありまして、直属教会長というだけで、そういう御命を戴いたのは、恐らく初めての事であります。それで台湾へ行かせてもらいましたが、その時、「わしも島流しになったんやな」と思いましたが、行ってみると米は獲れるし、茶は出来るし、果物は豊富だし、なかなかいい処でした。

五月に行って、六、七月と三ヶ月目のある日、南支派遣軍の騎兵中尉がやってきて、「天理教は南支派遣軍の方へ慰問にも来ず、宣撫工作(註)の仕事もしていないし、一体どうしとるんですか。早く来て貰わねばどうもならん」と藪から棒の話です。

考えてみると、中支へは慰問に行ったりいろいろしていても、南支は戦場が新しいせいもあってしていない。早速行かせてもらおうという事で本部へお願いして七月の終わりに、南支の慰問と宣撫工作の一環として日本語学校の開設に、台湾から私と書記の橋本さん、本部から紺谷先生と柴田さんの四人で行きました。往く時は中尉が証明書をくれたものですから、荷物は無賃、船賃も無料で軍用船で広東へ渡りました。広東は香港の北の方にあって珠江という大きな河を遡って行くが、途中からランチ(註)に乗り換えて広東の桟橋に着いたものの、どっちを向いても広東人ばかり、迎えに来てくれているかと思ったら誰も来ていない。どうしようかというところへ軍用トラックがやって来た。そのトラックの兵隊さんに、南支派遣軍の報道部はどこかと聴いたら、一時間ほど余裕の時間があるからとトラックで送ってくれました。ところが報道部に行って受付に書類を見せたところ「この書類は偽です。大体あの中尉は不届きな奴だ。あなた方は騙されて来たんや。お気の毒やけど、明日朝九時、憲兵隊本部へ行ってもらいたい」と広東に着くなりそういう事で困ってしまった。

しかし親神様は「落ちきったら上がるより他に道はない」と言っておられる。まあ何とかご守護頂けると腹をくくって翌朝憲兵隊本部へ出掛けて行った。暫く待たされていると、背広姿の人が入って来て、「あんた方天理教の人ですか。天理教の人は大体来ようが遅い」と最初から文句を言われた。出された名刺を見ると、広州水上分隊長憲兵少尉森田某と書いてある。そして言うのに、「私は群馬県の群高分教会の倅です。初めてお目にかかります。ご苦労さんでございます」と言葉つきが変わって丁寧になった。この人のお陰で、どうやら取調べも済み、その後の便宜も何かと図って貰う事ができた。親神様は「三十日といえば五十日先の守護をしている事を知らん」と仰せ下さっているように、

先先と先廻りをしてご守護下さった。

それから日語学校の開設に当たって、警務課長から日本人のいない処でやってもらいたいと言われて、指定された方面へ行きました。その辺りはまだ道の真ん中にバリケードがあるし、日本人は一人もいない。けれど土地柄は静かな処です。三階建、四階建の立派な家も、持ち主が香港の方へ逃げて空家になっているので、それを借りるのですが、そこの憲兵隊の分遣所にいる軍曹や伍長に聞くと、母親がおさづけを戴いているというような事で天理教を知らない訳ではないから、あちこち連れ歩いてくれて借家契約を致しました。分遣所の許可を貰わねば使用できないので、願書を提出しましたら、そこの准尉がやはり天理教に関係のある人で、許可証を明日出しましょうという事で何やら行く先々でお道を知った人を神様が配置して下さっているようで驚きました。今言った許可証も普通なら二十日はかかるところをすぐ出すというのでこちらが驚いた次第です。許可証が出たら、すぐおぢばへ帰って段取りにかからねばならないので、司令部へ行って、「船は五日先にしか出ないので、飛行機に便乗させて貰いたい」と言うと、これもすぐ手配書を作って持って行ってくれました。その日の午後、飛行場の管理者から電話があって、「天理教の人と聞いたら、親類の人のように思えてなりません。明日軍医が二人乗る事になっていますが、替わりにあなた方二人に乗ってもらいます」という事で、台湾経由でおぢばへ帰って広東日本語学校開設がまことにスムーズに出来たのであります。親神様が先廻りのご守護をして下さってあるという事は、一つや二つではない、お道の御用で通らせて頂いていると常に親神様が先廻りして下さっているという事を、しみじみと味わわせて頂きました。

尚、三代会長は昭和十四年三月三十一日付で台湾伝道庁長拝命、昭和十五年四月十八日本部准員に登用されている。

（この項続く）

（前史料部長）

註）宣撫（せんぶ）工作：軍隊占領地において軍政を施行する際、被占領地住民が軍政に対し敵対行動に走らず、協力的態度をとるようにするために住民への援助を行う仕事。

ランチ：帆走軍艦に積んでいたオールと帆を使う大型ボート。

こころの詩

▼天理教道友社発行『天理時報』、「時報歌壇」・「時報俳壇」より転載

▽笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

5月5日付　海松ヶ岡分教会　池田広子さん

寒暖のはげしき朝の庭すみに
春蘭の花ひそと咲きおり

5月12日付　海松ヶ岡分教会　藤井光子さん

ひらがなはやさしき字なり春うらら

四月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には 一列子供の陽気ぐらしを楽しみにこの世と人間世界をお創造（はじめ）下され御守護下されるばかりでなく 天保九年教祖を月日のやしろとお定めになり陽気ぐらしへのひながたをお示し下され 明治二十年教祖の御身をお隠しなされて後はご存命のままつとめとさづけを通して陽気ぐらしへとお導き下さいます事は 誠に有難く勿体ない極みでございます私共は身上事情を通してたすけ一条の親心に触れ 日々は朝夕に御礼を申し上げると共に ご恩報じの思いから親孝心一筋に御用の上に勤め励ませて頂いております その上から先日十八日教祖御誕生祭には多くの人が声掛け誘い合わせておぢばに帰らせて頂き 共々に二百十五回目の御誕生日をお祝いさせて頂きました 又翌十九日には婦人会員が同じく誘い合わせておぢば帰りし 親神様教祖に見守られつつ総会に参加させて頂きました

そして本日は理のお許しを戴きました御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同喜び感謝の心一杯に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて四月の月次祭を執り行わせて頂きます 御前には日頃のたすけ心の真実を五、五七四枚のおたすけお願いカードに込め 寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げ 尚も変わらぬ親心にお縋りする状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本日は世話人島村廣義先生にお越し頂いておりますお聞かせ頂く御講話を時旬に当たっての親の声と受け止め お喜び頂けるよう素直に実動に現して行く所存でございます 又来たる二十九日の全教一斉ひのきしんデーにはより多くの人に参加して貰えるようしっかりと声掛けし 共々に欲を忘れて勇んでひのきしんに汗を流させて頂きます

更には又 二十八日の教会長夫妻講習会に続いて来月は直轄教会へ巡教させて頂き 諭達巡教を受けた後の夫々の教会の動きを確認すると共に 諭達の更なる徹底を図るべく五月の二十五 二十六日の別席ひのきしん団参に一手一つに心を寄せ取り組む事を誓い合い 教祖百三十年祭に向けての年祭活動をより活発化して 目標であるおつとめ奉仕人増員に繋げて行く所存でございます

何卒親神様には 旬々にお聞かせ頂く親の声を成人の糧として たすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り真実の親を知り一列兄弟の理に目覚めて万互いに助け合って神人和楽の陽気づくめの世の状が一日も早く実現しますよう御守護お導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百七十六年 四月月次祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	岡崎真一
	田中隆之

講話	島村廣義先生

賛者	高木昭祥
指図方	森本忠善
	岡本久善

六月講話	谷内伸自

区分＼役割	坐り勤	前半	後半
地方	吉岡壽	上原繁道	佐藤道孝
	岡崎和夫	門脇元教	岡崎真一
	吉岡誠一郎	内海史郎	上原浩
おつとめをどり	大教会長様	中村邦義	中村剛
	岡本久善	谷内伸自	中島誠治
	上原繁道	田中隆之	上原志郎
	大教会奥様	佐藤香苗	武内正美
	田中ますみ	森本冨美子	岡崎豊子
	門脇郁子	谷内美知子	横山小智榮
笛	杉原博之	淺野明教	虫明立生
ちゃんぽん	赤木素志	中村道徳	岡崎輝彦
拍子木	森本忠平	森本忠善	横山逸郎
太鼓	笹尾正治	高木昭祥	田林久嗣
すりがね	河原節喜	三島涉	山田敏教
小鼓	岡崎真一	山野弘実	武内清明
三味線	虫明好美	高木孝子	三島照美
琴	今川佐智子	内海安子	門脇加津
胡弓	上原順子	笹尾一美	中村初美

大教会だより

‖辞令‖

立教176年4月21日付

◎登用

理事　吉岡壽
〃　佐藤道孝
幹部承事　河原節喜
〃　岡崎和夫
承事　三島涉
〃　今川昌彦
青年　杉原善朗
〃　上原喜三
〃　上原一始

◎三日講習会（Ⅲ）修了者

芦品加納　謙

◎本部食堂ひのきしん

自　立教176年5月1日
至　立教176年5月15日

大江橋　三宅友子

◎立教176年定期巡教

福山大教会奥様　高屋　佐藤道孝
神邉　岡本久善
島根大教会長様　久松大教会奥様
鶴山大教会長様　弥高山　佐藤道孝
陽備上原繁道　摩耶大教会奥様
金浦大教会長様　興明大教会長様
ひろさと大教会奥様　陶山　河原節喜
芳井中村剛　呉照吉岡壽
海松ヶ岡中村剛　東悠中村邦義
吸江大教会長様　照陽上原繁道
輝美濃中村邦義　新山邑大教会奥様
砦部岡崎和夫　明石市上原繁道
上下岡本久善　府中市吉岡壽
東城大教会長様　服部河原節喜

島中大教会長様
驛家上原繁道
油木岡本久善
葦陽大教会長様
湯田原岡﨑和夫
備中大教会長様
神昭上原繁道
美之郷佐藤道孝
錦備吉岡壽
笠晴佐藤道孝

訃報

佐藤理生人氏
陽實分教会長
5月7日出直されました。
享年　72才

よりみち

先日、書店である本に目が止まった。「漢字検定　頻出度順問題集」。1級から5級までずらりと並んでいた。まあちょっと！と思い、4級の本を開いて見た。○読み○書き取り○四字熟語○送りがな○対義語・類義語―などいろんな分野に分けて載っていた。

まず「読み」のページをやってみた。何とか読める。何だこんなものかと次の「書き取り」に移った。カタカナの部分を漢字に直せというもの。ここで早くも予想外の展開が待っていた。次の問題に進めない。あれ！あれ！の連続だ。「誤字訂正」＝文中に間違って使われている同じ音訓の漢字が一字ある。正しい漢字を記せというもの＝になるともう最悪。分からないのが多くある。

私もこれまでの経験である程度は読み・書くことは出来ると思っていた。が、現実を目の当たりにして愕然とした。よし！とカバンを下に置き、座り込んで本気モードに突入。いかに本気モードにスイッチを入れても忘れてしまったのか、初めから知らなかったのか出来ないものは出来ない。有りもしないプライドが音を立てて崩れていく。

1級・2級ならともかく4級ですよ。主なレベルと出題内容というページに「4級は中学2年生程度」と書いてある。

「情けにゃーのー。わしゃーもう『かさおか』の編集掛なんかやめちゃらー」と本を元の所に放り投げてやった。あまりにも大人げないので、もう一度、恐る恐る開いて見た。読めるが書けないのだ。大体の格好は分かるが正確には書けない。

それもその通りだと自分を慰める。書く作業の大半はパソコンか携帯電話のキーを押せば出来、ちゃんと漢字に変換してくれる。辞書を片手に書かなくてもいい時代になったのだ。しかし何か寂しい気もする。

「よし！4級だけでも征服だ。」と一念発起し本を買った。

熱しやすく冷めやすい私のこと、次回、このコーナーを書く頃には、本箱の肥やしか所在不明の物になってどこかに転がっているだろう。

（よ）

こころの詩2

▼養徳社発行『陽気』誌五月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「天」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

人位　東悠分教会前会長夫人　田林美智子さん

限りなく天空に舞う理のつばさ

佳詠　芦品分教会教人　金谷眞佐代さん

天気よし心勇んでにおいがけ

▼表紙写真

（吉岡輝昭かさおか編集部員）